

大阪市の都市再開発

——阿倍野市街地再開発事業を考察して——

津 末 千 早

大阪の経済的地盤沈下が言及されて久しいが、大阪市の内部でも発展に格差がある。CBDである東、西、南、北区などの市中心部や北部はおおむね発展している一方、市の南部は港湾地区などの一部を除いてまだ発展の余地を多く残している。この南部地区の発展が大阪市のこれからを占う大きな指針の一つになるであろう。

また、既に十分都市化した中心地区にも老朽化した建築物が数多く残存している。大阪市は大都市の中でも特に不良住宅が多く、住環境は良いとは言えない。このような状況が大阪市を魅力に欠けた都市にしてしまっている。

以上のことをふまえ、大阪市を活性化するための具体的方策として、都市再開発事業を取り上げ、中心都心部の整備や、南部地域の発展促進が市や組合の手によってどのように進められているかみていき、特に南部地域随一の都心であり、発達の拠点になる天王寺・阿倍野ターミナルの再開発事業を中心に考察してみよう。

天王寺・阿倍野ターミナルは乗降客数が大阪市内で第3位という恵まれた交通要所に位置し、南大阪の中心地、また大阪市の副都心として整備が緊急に必要な地区である。しかし当地区は、農地時代の農道を残存させたまま、都市基盤整備もなされず自然発生的に密集市街地化が進み、しかも第2次大戦による戦災も被ることなく今日に至っている。このため、防災・衛生・美観等都市計画問題の多い地区となり、また、商業・業務機能の集積率も低くなっている。

大阪市はこうした状況を打開するために、昭和44年、市街地再開発事業に着手した。当地区は昔から住宅地の性格が強かったため、この性質を生かしながら商業・業務機能も充実させるという、職住近接型の副都心を目指した。

しかし、事業は一部住民の反対等で遅れ、現在に至っても未だ完成の目途はたっていない。また、立ち退き等の急激な人口減少に伴う高齢化や一人世帯の割合増加、戦前から形成されていた昔ながらのコミュニティの崩壊等、問題も続出してきている。阿倍野地区の市街地再開発事業は前途多難の道程を歩んで行かねばならないだろう。

このような天王寺・阿倍野地区の再開発の停滞は南部地域にとって手痛いものとなっている。関西新空港の建設や地下鉄の南伸によって大阪府南部の人口は増加し、地価の高騰も著しい。発展しつつある当地域の玄関口とも拠点ともなるべき天王寺・阿倍野ターミナル周辺が、商業・業務機能を集積し、吸引力を付けなければ、人口がいくら増加しても昼間人口はCBDに流出するだけである。そこで生産・消費両方の活動が行われて初めて真にその地域が発展したと言えるのではないだろうか。南部地域がその意味で、真に発展するには、中核となる都心が必要なのである。

現に南部地域には、天王寺・阿倍野地区以外に新都心となり得る地区はない。少しでも早く、吸引力を持つ、魅力的な街になってほしい。当地区に商業・業務機能をCBDから拡張できたなら、大阪市全体の活性化にも大いに貢献するだろう。